

病根も宿す同族企業

「週末寸言」原稿 20071222

梅の木に猶やどり木や梅の花（芭蕉）。一句は、「網代民部雪堂に会う」と前書した芭蕉「笈の小文」のうち伊勢神宮を参詣した折りの作である。網代民部雪堂は、伊勢神宮外宮の御師職足代弘員の俳号であった。彼の父弘氏は談林派の俳人として当地に名を馳せた。氏は梅の木は梅の老木で父弘の息子雪堂の咲いた。「梅の花」御師の家を守つてきたばかりか、俳人としてのも立派に継承している。伊勢神宮の社前は実に禍々しい事態に見舞われた。「お福の不祥事に始まって、「お福餅」に「太閤餅」と出るわけやインモラルのオンパレード。実際に2003年、3000名が老舗の人の食った悪徳商法の白日の下にさらされた。偽装表示の悪徳商売は、お伊勢さんの社前ばかりではなかつた。じまり、高級ブランドの船場吉兆は、クワイマックスの船場吉兆も落ちた。悪事をすべて「従業員」は「他山の石」となる。

一族は自らが被害者だと、言わなければならない。この一連の不幸の企業形態に共通したのは、その一族が同族企業であった。その一族に厚く従業員に反感を誘発する露見しやすい同族企業の不祥事が露見しやすい同族企業の説明をする人もいるが、同族経営一流の閉鎖的体質が、原因だ。不正を鈍磨させる原因は、江戸時代創業という華麗な一族の家ご家族と会食をするという晴れがましい体験をした、それが、筆者は、若気の至り、その場をわきまえず、同族経営の不合理と不条席者から話をして、遭い同業者と、同族経営の良さは、朝起きた。同族経営の場からすでに、無き問題や改善点について打合せが出来る。休日・祭日も結果的に従業員の福利にも好影響をもたらしているのだ。記憶しような論理だったように、なるほど納得もしたのだが、バブル経済がうたかたのごとく消え失せるのと両家の経営が行き詰まるのは同時だった。やどり木にやどり木を接いでいる間に、家族愛の美德以外承されて、不治の病根も数多の世襲政治家にとっても、これは「他山の石」となる。